

# *Saturday*

**We color your everyday with something Saturday!**

# *Dinner Menu*

---

## **Main Dish**

-Something tasty to make you full.-

1. Party 『うらはらなマーブル』

## **Liquor**

-Something you'd better not take too much! -

2. Midnight Chat (R15) 『うそつきな小夜啼鳥』
3. Ice Cream (R15) 『まどろみ不在』

## **Dessert**

-Something sweet to cheer you up.-

4. Pancake 『月のない夜のパンケーキ』
-

## Main Dish

Something tasty to make you full.

# 1. Party

- うらはらなマーブル -



Yukari Kurumi Kikyo Yoko Runa Yuhi Kaede Tsukika

ピアノのいないオーケストラ。

Pov. Runa

はじめは、多忙なお医者様が、ネットショッピングでクリックするボタンを間違えたことだった。

最近した一番高い買い物、という至って女子らしいテーマで、それぞれが戦利品を披露し合っていたとき、ぽろりと返ってきた答えは、たしかにその会話の白眉だった。

「テーブルね」

診断を下す時、きつとこの人の声には迷いがないんだろう、と思わせる夕陽さんのすつきりした発声に、軽く眉を上げたのは全員だったと思う。

合わせて声も上げたのは、一番付き合いが古い、くるみさんだった。おっとりとした声音に、存分な不信感がまぶさされていて、その声音への感情の乗せ方があまりに鮮やかで、私は内心首をすくめる。

「テーブル？」

やわらかな声が促した説明は、今度はしつかりと、全員の眉をわかりやく持ち上げさせるに、十分な破壊力を持っていた。

「そう、大理石の」

「大理石!？」

予想を超えたパワフルな回答に、その場にいた全員が鋭敏に反応した。周りの反響は、発言者にとつても、おそらく予想外だったのだろう。全員のお酒の勢いも借りた大きなリアクションに、あまり物事に動じない性質の夕陽さんが、思わず体を引いていたのを覚えている。

「なんでまた、大理石のテーブルなんて」

呆れたような、どこか笑いを含んだ声で促したのは葉子さんで、子どもの頃の夕陽さんを知っているらしい私の上司は、プライベートだと、取引先の『畑中先生』を遠慮なく子ども扱にする。もう直接的な仕事の絡みはないらしいけれど、担当をしていたときはいつも慇懃無礼なくらいの敬語だったと、いつか楓さんが告げ口をするみたいに教えてくれた。

笑えたらいいんだけど、と言いたげに唇の端を持ち上げて、夕陽さんはぶつきらぼうに解説をする。

「間違えたんです」

「間違えたー？」

何日かぶりにこれから家に帰る、という夜勤明けのお医者様は、からかうような葉子さんの復唱に、どちらかと言うと叱られた子どものようなぼつの悪い表情になった。それをごまかす

ように、こめかみをゆるゆると指で揉みながら、手元のギムレットを舐める。

ギムレットと言つても、最後に自分で絞るはずのライムを、さつきからずつと指先で弄んでいるので、まだグラスの中は純然たるジンのはずだ。お医者様という事じゃないけれど、その果汁は胃のためにそろそろグラスの中に入れて方がいいですよ、と思う。

「やたら高いな、とは思つたんですけど」

ため息のように言い訳をする夕陽さんに、葉子さんは器用に右の眉だけ上げて見せた。こちらの手の中では、さつきまではお水のようなペースで空けられていた瀬祭の入った徳利が、少しずつ体温で温められている。

するりと熟練の技のような会話に滑り込んだのは、空気を読む気など毛頭持ち合わせていない伸びやかさの最年少だ。

「ゆーひつて、雑」

そこで気づきなよ、と苦笑した月果ちゃんの手には、こんな時間なのに、温かい烏龍茶がすつぽりと収まっている。銀色の取っ手がついた、きゅつと小ぶりの細長いグラス。

バーにそんな健康志向なものがあると知つたのは、ときどき飲むメンバーに彼女が加わつてからで、最近、仕事の飲みで、年上の人がたくさんいるときには、周りのメンバーがいい加減酔つぱらつたなど確信できた深夜一時頃、私も真似して、一杯だけ頼むことにしている。

やつぱりアルコールって、体型維持に良くないから？ とダイエットの参考にしようと尋

ねた私に、月果ちゃんは何を当然のことを、と言いたげに眉を跳ね上げた。「寝る予定がない相手といるときは、呑まないの」と。「がっかりした？」と勝手に頬にキスをした二十二歳に、叱るのも忘れてついつい苦笑いしたのも、もう数週間前のことだ。

最年少にもかかわらず、全員のことを呼び捨てにするのは、十代の半ばまでお父さんの実家があるアメリカで過ごしたせいらしい。ネットで検索すると、お父さんと小さい頃の月果ちゃんが、大統領やら首相やらの横で、につこりとカメラに笑いかけている写真が、じゃんじゃん出て来たりする。

その頃の写真を見るに、本当は淡いブラウンの髪は、仕事上ウケがいいからという理由で、わかりやすいブロンドに染められている。瞳は可憐なブルーで、こちらはカラーコンタクトによるものではないようだ。

更に特筆すべきは手脚の造形の美しきで、それらを最大限有効に使って、奔放なお嬢様は、自力で生計を立てている。パーツモデル、と最初に聞いた時には、耳を疑った。なんでモデルじゃなくて？ と。

「ともかく」

一方、こちらはいっそシルバーに見える薄いブロンドをかき上げて、夕陽さんはやけくそのように、グラスに刺さったライムを齧った。あ、と思う。

「間違えたの。木のテーブルを見てたはずなのに、届いて納得。あの値段取られるわけだわ」

これで少なくとも、口の中で頼んだメニューは完成したわけだ、と私が的外れなことを考えていると、しみじみ呆れた葉子さんの声が耳に流れ込んでいた。

「それで、今、家に大理石のテーブルがあるわけ」

「そう言ってるじゃないですか」

もももごと呟いた夕陽さんは、ほとんど、お使いのお金を使いこんだことがばれた小学生みたいだった。

まったく！ という、いつそ楽しそうな私の上司の相槌を皮切りに、それまで黙っていた人間も、一斉に口を開く。

「金持ちか」というのが、楓さんのツッコミで、「人が殺せそう」というのが葉子さんの意見で、「返品できないの、それ？ 調べてみた？」と唯一まっとうな反応をしたのがくるみさんで、そこまではまあ、よかった。ひとり、「うわあ」とうれしげに顎の下あたりで手をたたき、「それはあれしかないわね！」と声を弾ませたのは、桔梗さんだった。「売るほど餃子を作りましたよ！」

他にも語るべき感想を持っていたはずの人間も、全員まとめて言葉を失った。なんなんだ、餃子って。

代表して疑問を口にしたのは、テーブルの持ち主だった。



「餃子？」

夕陽さんの、流行より少し細く整えられた眉が、くいつと上げられた次の瞬間には、ああ見えてその場の誰よりも仕切りの上手い現役教師により、全員の六月最初の土曜日のスケジュールが抑えられていた。

実を言えば、その土曜日、私には既に予定があった。前に住んでいた街まで少し足を延ばして、馴染みのヘアサロンに髪を切りに行くつもりだったのだ。でも、私はその予定を、後ろ手に持った iPhone のアプリで静かに消去した。

これはまたとないチャンスだ、と確信したから。

私がこの数週間ほど気になって仕方がなかった疑問を、まとめていつべんに解決するための。



Liquor

Something you'd better not take too much!

## 2.Midnight Chat

ファイティングール  
- うそつきな小夜啼鳥 -



Yukari Kurumi Kikyo Yoko Runa Yuhi Kaede Tsukika

あなたに似た人。

Pov. Kurumi

祭りの後、と言う言葉が、わたしは好きだ。

その後戻りできない響きがいいし、そこかしこに色彩が溢れているのに、がらんと静かなところも安心できていい。何より、もう始まるのをまたなくていいのだ、という安堵感が、わたしはお祭りの前日のわくわく感よりも、ずっと好きだった。

だから、こうしてにぎやかな夜の終わり、カーテンコールが終わった後のような部屋に、ひとり残されるのは気の重いことではなかった。

すっかり酔いつぶれてしまった部屋の持ち主は、もはや起きる気配などない深さでソファ―に体をうずめている。

「飲んじゃって」

そうつぶやき、わたしは部屋を見渡した。

かろうじて、使い終わったお皿がまとめられ、大きなごみ袋に今日一日で出たごみが全部まとめられているけれど、ビールや缶チューハイの空き缶はまとめたとんでもかかなりの幅を机の上で取っているし、空き瓶に至っては机の上に置ききれず、床に転がっていた。

まずはごみをきちんとまとめ、玄関に脚と同じく手も長いモデルを立てせ、その腕に紙袋

につめた空き瓶と空き缶、そして両手に大きなゴミ袋を二つ持たせる。

「……かかしになつた気分だ」

それじゃ困るわ、動いて早く捨ててきてね、と薄い体を回転させ外へ押し出すと、なんとかエレベーターのボタンを押した原月果は、「くるみ怒ってる」と不満そうな顔をした。

返事はせずに部屋に戻り、おしゃべりなかがしに戻ってくる前に、熱いお湯で片っ端から洗いを済ませる。きゅつと、最後にシンクを拭いたところで、がちやりと玄関で音がする。かえりましたよーとにぎやかな気配が廊下から立ち上り、この子はいつでもひとりでお祭りみたいだ、と思う。

「おかえりなさい」

リビングを片付けて、と顔を上げず指示を出すと、ぶつくさ言いながらもスツールやクッションを片付けている気配がした。「くるみはなんだかご機嫌ななめだ」聞こえてきた咳きは、もちろん聞こえないふりをした。

おおかた綺麗になつた部屋で、何度か夕陽の肩をゆする。「んんん、ん……」寝息としか言えないくぐもつた声が漏れるばかりの反応に、それ以上起こすのを諦め、まだかけていたメタルフレームのメガネを外してやり、寝室から掛布団を持つてくる。

「月果ちゃん」

「はいはい」

「何も、こんな状態の夕陽の家に泊まらなくてもいいでしょう？」

別に月果は気にしない、と伸びやかなふりをして年若いモデルは、さつき綺麗にしまったばかりのストールにでんつと腰かけた。

「夕陽が酔っぱらいでも、月果は困らない」

そして、背の高いストールという言葉を無視するかのように、座ったまま膝を折り曲げ、ぐつとこちらもやたら長い両腕を太もの間につくと、子どもっぽい動作でぐいつと上半身を傾けた。

「なんだかさつきから怒ってるおねーさんが、困るのはくるみだつて言うなら、考えてもいいけど」

要は、とわたしはその挑発には乗らずに、目を細めた。

「この立地で、快適に生活できる場所があればいいんでしょ？」

＋＋＋

「わーすごい。これはこれですごくきれいだ」

ばたばたと部屋に入ってくるなり、さつきまで不満げだったモデルは、歓声を上げた。さつ

きと同じ間取りの部屋。ただし、階数だけが違う。したがって、夕陽の部屋からは見下ろす語りになる東京タワーは、ここからだとはぼ目線の高さに見える。

「おじやましまーす」

あつという間に服を脱ぎ始めた相手に、お風呂はあつちよ、と釘をさす。

「これで、問題ないでしょう？」

ないない、とうれしそうに原月果は首を振った。せっかく脱衣場を教えたのに、この時点で既には下着一枚になった軽装で。脱いでもいやらしい感じがまったくしないのは、さすがモデルだな、という感じがした。

「おんなじ部屋なのに、なんか違ってておもしろい」

「そう？」

「こつちもいい部屋だね」

つまりはそういう話で、同じタワーマンションの同じ角部屋に、わたしも自分の部屋を持っているのだった。

リビングで下着まで全部脱がれる前に、なんとか大きな体をバスルームに閉じ込め、わたしは一杯だけお水を飲んだ。うすはりの、本来なら日本酒をいただくグラスで。

誰かが家にいる夜、夜中に飲む水は、なんだか不思議とお酒めいた味がする。

鳥の行水、と古典的な表現をしたくなる速さで、にぎやかなお客様がお風呂から出てきて、その一瞬の静けさはふわりと闇に融ける。案の定、バスタオルを腰から下に巻いただけで、胸元はまだ生乾きの長い髪で隠し、「あ、それお酒？」と明るい声を上げた。

「あなた、お酒なんて飲んでなかったじゃないの」呆れて視線を外すと、左手からくつとグラスを抜き取られる。「もう飲んでもいいの」

よくわからないことを言いながら人のグラスに勝手に口を付け、「あれえ、これは水のように飲みやすいお酒ですねって、ただの水じゃん！」と騒ぎ立てる。

「自分の家で、どんなグラスでお水を飲もうと自由でしょ？」ベッドを使っているから、先に寝てて、と言いつつ、わたしも今日を終わらせるためにバスルームへと向かった。

洗面台の脇に置いてあるバーム状のメイクリムーバーを手に取り、たつぷりと顔に伸ばす。そのまま汚れていない小指でドアを開け、シャワーも捻った。熱いお湯が、するすると今日のメイクを落としていく。

我が家のバスルームは、とても静かだ。

ホテルのように、しつかりとした大きさはあるけれど、全体的に少し浅い浴槽の白と、大きな鏡のシルバー。それ以外は壁も床もつやつとした黒で、この家を内見した時、そこがいちばん気に入った。



ひとり暮らしなので、座るための椅子や洗面器などもなく、作り付けの棚にシャンプーとトリートメントとボディソープ、それから洗顔フォームが置いてあるだけの簡潔なバスルームだ。すっきり煙とアルコールの匂いが付いた髪を、たっぷりしたお湯で流し、ゆつくりとすすぐ。いつもよりぬるい気がして振り返ったところにある温度計を見ると、案の定、三度ほど下げられていた。どうやら健やかな四肢をもったお嬢さんは、体が猫舌らしい。

心地よい熱さまで水温を上げ、お湯に体をうたせながら、すぐに泡が立つシャンプーで髪を洗う。軽くなった髪を勢いよくすすぎ、水気を切ったところで、トリートメントをなじませた。軽いパーマをかけている髪は、ぬれているときが一番セットをしたみたいにくつきりとウエーブが出る。

手を洗い、こちらは少し努力をしてたっぷりと泡立て、顔を洗う。髪をすすぎ、上がったバスルームの端には、見知らぬ洋服がちんまりと畳まれていて、「ああそういうえば人が来ていたんだっけ」と思い出した。

生乾きはきらいなので、しつかり髪を乾かすことにしている。保湿は出てすぐする主義なので、その前にまずは化粧水をたっぷりと肌に含ませ、その後は髪を乾かす合間に、オイルと、クリームをそれぞれ順番に浸透させる。

いつも通りバスローブを羽織って廊下に出ると、せつかく言い残した誠意は無駄だったらしい。

もう眠っていてほしかったモデルは、ベッドではなくコーナースファアの長辺を陣取り、今はきれいに乾いたブロンドを胸元に広げて、とてもはじめて上がる人の家で取る行動とは思えない大胆さで寝転び、ひらひらと手を振っていた。

子どもは寝る時間よ、と近寄った瞬間に、くるりと世界が反転した。

Liquor

Something you'd better not take too much!

## 3. Ice Cream

-まどろみ不在-



Yukari Kurumi Kikyo Yoko Runa Yuhi Kaede Tsukika

余韻なんて、ないのがいちばん。

Pov. Yoko

ベッドから起き上がるときは、いつだって、死ぬほど未練がましい気持ちになる。

後三分、後五分、とわざと早くかけた目覚ましをやり過ぎして、とろとろとまどろむ数分間  
が、執着しないことだけを旨に流れているようなわたしの人生において、いちばん、何かに執  
着をしている瞬間だ。

でも、そんな風にぐずぐずとシーツの感触を楽しむのは、朝だけと決めている。

まだまだウィークデイも折り返しに差し掛かったばかりの週の中日、水曜日の午後時十一時  
は、汗をかいた後まどろむには少し不適切な日時だ。

「コーヒー、飲むでしょう？」

ん、と言う「うん」とも「ううん」ともいまいちきつちり判別のつかない返答を背中に、わ  
たしはするりとシーツの間を抜け出した。

十十

空調の効いた室内は、さつきまでは暑いくらいだったのに、汗が引いた今は、もはや少し肌  
寒い。

羨のいい猫のような自然な我儘さで、人のベッドの半分以上を占領しているピアニストは「う」ではなく、「い」の形から否定の返事を始める。「いや」とか、「いいえ」とか。

そこから鑑みるに、今のはおそらく、彼女なりの肯定の返事なのだろうと、勝手に納得し、質問を重ねることなく会話を終わらせると、わたしは大きく伸びをした。

腰の下で、さつきまでほうるさく鳴いていたベッドのスプリングがきゅつと小さく喉を慣らし、そういえばそろそろマットレスを買い換えなくちゃ、と、とつくに切れたはずの保証書の日付を思い出そうと試みる。

その思考の合間に、腰からおなかへ、おなかから胸へと上がってくる、お行儀の悪い子どもの手をなめらかに引き剥がす。特に不満そうでもなく、離れた手の持ち主から、

「ようこさん」

眠っていたわけではないのに、たつぷり眠りこけた後のようにふわふわと輪郭の溶けた声で呼ばれ、思ってもいないお褒めの言葉を頂いた。

「葉子さんのそれ、好きよ」

「え？」

「一仕事終わった感があって」

情緒がなくていいと思う、と悪意のない声で褒め称えられ、ありがとうというのも変な気がして、振り返らないまま軽く首を傾げてみせる。

ピアノストという、言われてみれば非常にその見た目に似つかわしい肩書を知ってから久しいのに、彼女のピアノはまだ聴いたことがない。だから、どんなピアノを弾くのか、未だにわたしは知らない。

芸術的なのか、優等生的なのか、あるいはびつくりするほど情熱的なのか。

ただ、褒め言葉のセンスは、控えめに言つて、不思議なオリジナリティに溢れている。そんなことをぼんやり考えていたら、再び名前を呼ばれた。

「葉子さん」

させてくれる人なら誰でも好き、と豪語する伸びやかな二十四歳は、その信条通り、癖のない交わり方をする。そんな中、癖らしい癖と言えば、寝ているときも、寝る前も、寝た後も、やたらと名前を呼びたがることくらいで、そのたびに、最初に彼女にその技を教えたのは、いったいどんな年上の女だったのだろう、と思う。

「よーこさん」

ごろん、と寝返りを打つ音が聞こえ、まだまだ起きる気配がない眠たげな手が、ふわりと伸びてきて、背骨をなぞるのがわかった。

「きれいな背中」

松永楓なら、こんなとき、ただ一言、「鍛えてますから」と返すのだろう、と思う。褒められるのが上手い人は、よほど心がまっすぐな人（たとえば月果みたいに）か、きちんとそこに

裏打ちする何かがある人だ。

残念ながら、そのどちらでもないわたしは、曖昧にすら返事をせずにその言葉を聞き流すと、もともと返事など求めていなかったようなスムーズさで、二の句が継がれる。

「いい背骨」

そちらには反応する暇もなく、別のことへの反応が、唇から洩れた。

「ちよつと……」

ぴちやりと音がして、背中をなぞっていたものが指から舌に変わる。

「ちよつと」

語気を強くして身をよじる内に、尖った舌先がたどる場所も、背中と言うには下過ぎる箇所になつていた。

「ねえ」

やめなさいなのか、もうしたでしょう、なのか迷っている間に、今度は少しずつ唇が上になつてくる。

「葉子さん」

舌を這わせる合間に、少しの甘さもない口調で人の名前を呼んで、いつのまにか起き上がった半身が、びたりと裸の背中に吸い付いてくる一瞬前に、わたしはがばりと立ち上がった。

「お湯を沸かすわ」

宣言をするのが、秘訣だと知っていた。

「さあ、起きるわよ」

さっきまで体を起こしていた二十四歳は、ばたんと人のベッドにまた背中を預け、ずいぶんと楽しそうな顔で、「つまんない」と呟いた。「コーヒーより、もう一回、葉子さんがいいんだけど、わたし」

たぶん、扇情的と言うべきなのだろう。背中から溢れ、ベッドに波打つ長い髪も、何も隠す気のない体のいちいちの美しさも、まるでよくできたアニメーションのようにきれいな線を描いている。でも、そのまま一緒にベッドに倒れ込みたくなるには十分な破壊力のあるその体を叩き起こす魔法の言葉を知っていた。

「でも、アイスクリームは食べるんでしょう」

手早く髪をまとめながら訊くとうやくやく、返事の代わりに、ひらひらとレースが宙を舞った。数時間前に外された、華奢なわたしの下着。

それをキャッチしようとしたら、伸ばした腕をぐつと掴まれた。

「わ」

「心配しなくても、しないのに」

「え？」

ここにいたって、と悪戯っぽく首を傾げられる。



## Dessert

Something sweet to cheer you up.

# 4. Pancake

- 月のない夜のパンケーキ -



Yukari Kurumi Kikyo Yoko Runa Yuhi Kaede Tsukika

ごちそうさまでした。

Pov. Yukari

ぼろん、と夜中に頭の上で鳴る着信音は、いつもめんどうと幸福を混ぜ合わせたお誘いを連れてくる。「パンケーキを焼くから今からおいでよ」という、親切なのか嫌がらせなのかかわからないLINEの着信音で、わたしは目を覚ました。

理不尽だな、と思う。

メールの内容が、ではない。

こんな夜更けに出てこいという相手が、わたしの人生で唯一、「女の子のひとり歩きはあぶないから」と本気で心配してくれた女の子だからだ。

連絡が来るたびにいつも思う。

「さてお姉さん、ゆかりは、それでどうすればいいの？」と。

幸福にいじわるな気持ちで。

十十

今日は珍しく仕事が明るいうちに終わり、その後、同じホテルのバーで開催された打ち上げパーティーに顔を出しても、家に返ってきたのは九時少し前だった。いただいた花束を飾るか

迷って、贅沢に散らした半身浴を楽しんだ。

お風呂上りの肌にすばやく導入化粧液、化粧水、乳液をなじませ、最後に奮発して買ったクリームで蓋をした。いつもより丁寧に全身にボディークリームも塗り、たまには早く寝ようかとベッドに入ったのが、十一時過ぎ。約一時間前の事である。

メイクをしている間ならば、たとえ朝の四時であっても、わたしは呼ばれた会合には顔を出す主義だけれど、逆に、一度メイクを落としてしまえば、それがたとえまだ宵の口でもその日はもう営業終了。決してわざわざもう一度鏡に向かつて、身支度をしたりはしないことにしている。

でも、この連絡は特例だった。

簡潔なお誘いの後に、ぼわんとおまけのように浮かんでいるスタンプを寝ぼけた瞳で眺め、アプリを閉じて、一回画面をロックする。そうしておいて、もう一度ホームボタンを押し、わざわざ大きく表示されたたロック画面で、時計表示を確認した。

夜中の十二時だった。

ということとは、これは普通に考えれば、おそらく嫌がらせの部類に入るのだろう、と思う。あるいは、なにかを試しているか。実際、わたしのiPhoneには、一回寝ただけの相手からそんな駆け引きめいた連絡がよく届く。

その場に、その日寝た別の子が転がっていれば、その内容を見せて、「ねえ、これどう思

う？」と意見を仰いだりすることもある。だいたい、連絡を寄越してくるのは、同い年か年下だ。意地が悪いわね、と笑って、勝手に返信をしてくれるお姉さんが多くて、わたしはそういうとき、自分がいやな女だな、と思う。まるでいつぱしの遊び人を気取ってるみたいで。寝ている最中よりも、よつぼど下世話な気がする。

ただ、今わたしの睡眠を邪魔したこれが、駆け引きでも、ましてや嫌がらせなどでは決してないことは、誰に訊くまでもなく、このわたしがいちばんよく知っていた。

千海瑠菜との関係性においては、こういうことは昔から、度々あった。

「よく」と言うほど頻繁にはないけれど、「たまにある」と説明するほど生やさしくはない頻度で。

#### 4.Pancake

～ To be continued…? ～

+ Adult but Platonic. +

# *Saturday*

## **Dinner Menu**

無責任会社サタデー  
saturday.m.company@gmail.com

文・星羅にな  
絵・綺月るり

発行 2016年6月5日 初版発行

印刷・製本 サンライズパブリケーション株式会社様